

「また会えるね」

この実践は、「子どもたちが畑や生き物との関わりの中で、畑の作物を守りたい、生き物のことを大切に育てたいという思いを友達と共有し、地域の専門家や保護者から学びながら、自然体験を深めていく姿」に注目しています。「育てている生き物を守りたい!」「もっと植物・生き物のことが知りたい!」との思いに保育者が寄り添い、子どもたちの自然との関わりを広げ、体験を深めるような環境構成を工夫しています。

地域の方々も保護者と同じ目線で、子どもたちのことをよく理解して関わっていることから、地域の方々との関わりが日常的になることにより、繋がりが深くなってきていることが伝わってきます。

二本松市立川崎幼稚園

4～5歳児

課題意識をもつ保育者～ミミズを知らない子ども～

- ・4月、保育者は、ミミズをオモチャの様に感じている子どもたちの実態を知る。入園前、自然と関わるのが難しい環境下にいる子どもたちにとっては、無理もないことだった。そこで、年間計画を見直し、直接体験を多く取り入れて、子どもの育ちを探っていくこととした。
- ・5月下旬、地元の高砂会の方に、サツマイモの植え方を教えてもらう（4月にはジャガイモを植えている）。

ポイントになる環境・援助

地域の方との交流を深める機会を作る。
専門家の智慧に学ぶ機会を作る。



「寝かせるように同じ向きで植えるんだよ」

「植えた後、やさしく布団をかけるように、土をかけてやるんだよ」



「お山に向けて植えればいいんだね」

「こんなふう」

困ったことを解決したい・もっと知りたい

「もっと知りたい」「大切に育てたい」思いを受け止める。高砂会の方とゆっくり話す時間を作る。

- ・無事植え終えたところで、子どもたちから質問が出てくる。
「毛虫が来たら、どうしたらよいですか?」
「サツマイモには虫が来ますか?来たらどうしたらよいですか」
「オオニジュウヤホシテントウ」というテントウムシと毛虫が、ジャガイモの葉っぱを食べているんです!

おじいさん:「毛虫やテントウムシが来たら手で取ってね。嫌な人は、割り箸でもいいよ。葉っぱを食べられてしまうと、葉っぱから栄養が取れなくなってジャガイモもサツマイモも育たないからね」

Fさん:「よし!じゃあ!デコピンしよう!」

おじいさん:「あげなくても大丈夫。自然の雨で足りるんだよ」

「お水はどのくらいあげるのですか?」



高砂会のおばあさんたちのつづやき

「これらの虫は悪い事すんだから、ペットボトルに入れて、水攻めにするのが一番だ。でも、今は子どもには、そうは教えないんだばい!？」

- ・毎日、ジャガイモとサツマイモ畑へのパトロールを続ける。デコピンは全員が平気で、オオニジュウヤホシテントウを見付けると、弾いていく。さすがに毛虫は木の棒で取り、園庭の外に出していた。

【考察】 園庭内に畑があるため、毎日様子を見ることができた。ジャガイモを観察するうちにさらに知りたいことがたくさん出てきていた。葉に付く虫に困っていたため、高砂会に自分たちで質問をして、解決策を知ることができた。「困る→考える→直接聞く→知る→どうやって?→やってみよう!→面白い!」と、繋がっていったと思われる。F児提案の遊びを取り入れた解決策で、翌日からパトロールが一段と楽しくなった。おばあちゃんたちのつづやきの、幼児に配慮した関わりのように、地域の方々との交流は、双方互いに刺激になっている。

興味をもつ～オタマジャクシと出会う～

- ・5月下旬、隣接する小学校のプールで生まれたオタマジャクシをもらう。バケツに移して運んでくると、思い思いに観察を始める。見るのも触るのも初めての子が多く、喜んで大騒ぎし夢中になる。

「くすぐったい!」「カエルになるんだよね」
 「このおなかから産まれてくるんでしょ?」
 「違うよ!手と足が生えてくるんだよ!」「だっておなか大きいよ?」

生き物の変化に気付く

- ・手に乗せたりつまんだりするうちに数匹が弱り出し、弱ったものから他のオタマジャクシに食べられていく姿を目の当たりにする。

「弱ってきたよ…」「お腹からなんか長いのが出ている」
 「気持ち悪い…」「かわいそうだよー」
 「育てる?」「逃がそうよ…」「持って帰りたい!」
 「もっと食べられちゃうんじゃない?」

生き物との関わり方を振り返りみんなで考え合う

- ・オタマジャクシと関わる加減が分からず結論が出ないままになる。持ち帰りたいという意見もあったため、家で相談してくることにして、保育室に置いておく。一晩が経ち、数が減る様子もなく無事に過ごせたとクラスで安心。
- ・家の人と相談してきたことをクラスで話し合う。

Gさん:「ばあちゃんに聞いたらね、手の上に乗せているとね、心臓がビクビクして止まっちゃうんだって!」子どもたち:「怖い」「かわいそう」
 Mさん:「昨日、手の上にずっと乗せていたよ!」
 Bさん:「人間がずっと水の中にいたら、死んじゃうもんね」
 Iさん:「でも、カエルになるところを見たい」
 Aさん:「じゃあさ、幼稚園の田んぼに入れてあげたら?」
 Mさん:「残りは、下の田んぼに逃がしてあげたい」

話し合いの結果、園の田んぼに8匹、残りを近所の田んぼにバケツで運んで放すことに決める。

その後、田んぼを見に行く度に、オタマジャクシやカエルになった様子をよく見ていた。

ポイントになる環境・援助

生き物と直接関わることのできる場をつくる。



友達や保護者と考え合う場をつくる。保護者にも子どもたちの姿が伝わるようにする。



「お水がこぼれないように そーっとね」



「カエルになってね」



「お友達がいっぱいいるからよかった」



「元気に泳いだよ!」

[考察]

- ・オタマジャクシがミミズと同様、子どもたちにとって身近な生き物でないことが分かる。家に話を持ち帰ったことで、保護者にも子どもたちの姿を知ってもらい、この後の活動へのヒントをもらうことができた。話し合いは、子どもたちが自分たちで納得し、手立てを考えるうえで大切にしたい活動である。
- ・4、5月から、身近な生き物との関わりを積み重ね、少しずつ子どもたちの中で生き物への興味が膨らんでいき、徐々に生き物に対する接し方や思いが変わってきている。